

2 上流域

(1) 自然環境の概要

下野山地(帝釈山地)を流れる源流区間は、V字谷が見られる壮年期の峡谷を形成し、源流那須岳周辺地域は、高原山周辺とともに日光国立公園に含まれている。

源流区間の標高は概ね600m(那須野原扇頂部の標高)～1,900m(那須岳の標高)である。

気候は日本海側と太平洋側の影響を受け、地形も変化に富んでいて、那須火山群や標高約1,200mに位置する沼原湿原があり、多様な生物相が見られる区域となっている。

源流区間の下流、標高約120m～600m付近には、那珂川と箒川に挟まれた大規模な複合扇状地である那須野原(那須野ヶ原)が広がっている。那須野原扇状地(那須扇状地)中央を流れる蛇尾川と熊川の河川水は、平常時には全量が伏流するため水面が見られないが、日降雨量100mm程度になると、表流水となって流れる。扇状地中央で伏流した河川水は扇状地末端の親園(大田原市)、市野沢(同)等で湧出し、湧水地群を形成している。そこは年間を通して水温変化が少なく、水質は良好で、湧水特有の生物が生息・生育している。

那須野原にはアカマツ林やクヌギ、コナラ林が分布し、栃木県内でも豊かな雑木林が残り、森林・疎林性の鳥類、哺乳類、昆虫類が見られる。

牧草地の大部分は、施肥による管理が行われている人工草地になったが、火入れや刈り取りによる伝統的な管理が行われている草原もわずかにあり、草原性の生物にとって重要な生息環境となっている。

那須塩原市、那須町、大田原市は、那須岳と那須野原扇状地の境界付近および那須野原扇状地に位置し、変化に富んだ地形条件の中に、雑木林やため池がモザイク状に分布している。また、圃場整備がなされていない耕地や水路が一部残っており、高度経済成長期以前の日本の人里に存在した豊かな生物相の面影が見られる。

源流域の河道内では、植生はほとんど見られないが、那須野原を流れる川幅の広い区間では、オオバヤナギ林が形成され、砂礫河原にオギ群落、ツルヨシ群落が見られるようになるところがある。



※図中の赤字の場所は本文中で取り上げた環境

図 4-2 那珂川上流域の自然環境位置図